

〈通俗〉への忌避と〈歴史〉への接近

——山手樹一郎に見る昭和十年代の大衆文学言説

影山 亮

一 問題設定

「桃太郎侍」や「夢介千両みやげ」などの諸作で多くの読者を獲得し、昭和三十年代には毎日新聞社刊『読書世論調査』の「好きな著者とその作品」項目の常連としてランクインし、作品の映画化は年に三〜四本を数え、貸本業界では漱石、乱歩に次ぐ人気を誇っていた時代小説家、山手樹一郎。現在では忘れ去られた作家の一人となった感があるが、著作年譜の整備により文学研究の組上に乗せるべき点が浮上してきた。山手作品といえは先の二作に代表されるような、江戸時代ではあるが明確な時代設定を取らない、お家騒動や道中物が大半である。しかし本稿では、昭和十年代に尊王攘夷を扱った作品が集中している点に注目したい。山手の創作活動は大正期に端を発するが、同時期において尊王攘夷を扱った作品は「ミクニノタメニ」(『小学画報』大正十四年三月)の一作のみである。昭和に入り、九年までは見当たらないが、十年代に入ると二十八作と増加する。一方で戦後、昭和二十年代

は十二作、三十年代は三作、と減少していき、四十年代以降は、逝去する昭和五十三年まで見当たらない。こうして年代別に概観すると、やはり昭和十年代における尊王攘夷ものの集中具合は、目を見張るものがある。

昭和十年代といえは日中戦争から太平洋戦争へと向かうなかで、徳富蘇峰『近世日本国民史』(以降『国民史』とする)の普及に代表されるよう、歴史に関する書物の刊行や論争が盛んな時期であった。一方で文学メディアに目を移すと、大正後期から勃興した大衆文学領域は当初、時代小説ジャンルと探偵小説ジャンルで構成されていたが、昭和初年代から通俗文学が流入する事態となっていた。(〈通俗〉と同領域の範疇として認識されることを忌避した時代小説ジャンルの作家が取った方針は、歴史小説へ接近することであった。つまり昭和十年代は社会状況だけでなく、文学メディアにおいても、時代の雰囲気として〈歴史〉が希求されていたと言えるだろう。この時期の大衆文学領域における状況には、領土の拡大による内地作品の需要、内務省からの検閲による愛欲小説や股旅小説への取締りなど、複合的な事象に起因して

いることは言うまでもない。

本稿では同時代言説の整理をすることで、山手なりの〈歴史〉への歩み寄りとも言える、自作と『国民史』との並走ぶりを一例に、これまで議論されてこなかった、昭和十年代の大衆文学領域内における様相を、純文学領域に対しての大衆文学領域という概観的な視点からではなく、より事象に寄り添ったミクロな視点から明らかにする。

二 正当性の根拠―徳富蘇峰『近世日本国民史』

蘇峰の『国民史』は大正七年七月一日から昭和四年一月十六日まで『国民新聞』に、以降は『毎日新聞』に連載され、戦後に一次中断するものの昭和二十六年に再開、翌年四月の最終稿脱稿まで三十四年を要した畢生の名著である。全百巻のうち、ペリー来航までが三十巻、それ以降から明治維新までが残りの七十巻という内容構成である。蘇峰自身が「予が少年時代からの嗜好」と述べていることから、幕末から明治維新までに最も紙面が割かれた構成は、作者自身のこだわりだと判断できる。同書は正宗白鳥が「通俗の読み物としては、気軽に面白く読める」と述べているのをはじめ、連載以来、菊池寛や吉川英治、また蘇峰とは思想的立場の異なる大杉栄も含めて、多くの同時代作家や知識人に読まれていることは、先行研究の蓄積からも判明している⁴⁾⁵⁾。

明治二十三年に国民新聞社を設立し、約四十年にわたって社長兼主筆として同紙を牽引してきた蘇峰だが、関東大震災による社屋全焼によって言論活動の基盤を失う。しかし昭和四年に『大阪

毎日新聞』、『東京日日新聞』から社賓として好待遇で迎えられたことが、ターニングポイントとなった。山本武利『近代日本の新聞読者層』（法政大学出版局、昭和五十六年六月）によれば、昭和二年から十七年にかけて『大阪毎日新聞』の一日あたりの発行部数が1,166,432部から1,653,248部、『東京日日新聞』は450,000部から1,418,125部と増加している。『国民新聞』の150,000部から81,351部の減少ぶりと比較しても、活動基盤の拡大は明白だろう。さらに和田守の論考⁶⁾に詳しいが、蘇峰の思想的立場に同調し、諸事業を支援するために昭和五年二月に発足した「蘇峰会」は、全国各地に一万人以上の会員を擁していた。各地方に置かれた同会支部による草の根運動などのバックアップもあり、蘇峰は昭和十七年二月に「日本新聞会」会長に、五月に「日本文学報国会」会長に、十二月に「大日本言論報国会」会長にそれぞれ、就任している。三つの文化統制団体の長を兼任し、いわば言論界の大御所となった蘇峰には、昭和十八年に文化勲章が授与された。ピン・シンは同時期の蘇峰について次のように言及している。

軍国主義の指導者たちにとって蘇峰は、なんら官職にはついていなかったとはいえ、どんな重大な事件が生じようとも、正当化と歴史的解釈を与えてくれる源泉として頼りにできた数少ない人物のひとつのようにおもわれた⁷⁾。

歴史研究の領域においては、この時期の蘇峰が政界と結びつき、言論界において影響力を持つていく過程を、批判的に捉えている

のが一般的だ。その論証は本論の目するところではないが、『大阪毎日新聞』、『東京日日新聞』の活動基盤を得て、政界と結びつき、結果として言論界の大御所という地位に上り詰めたこの期間が、蘇峰の長い生涯のなかで、最も社会的地位と名声の高い期間となったのは事実である。

また『国民史』が広い読者を獲得していく過程で、大きな要因となったのは普及版の刊行である。民友社から刊行されていた『国民史』が五十巻に到達したのを記念して、昭和九年九月に権利を譲渡された明治書院から販売されたのが普及版『国民史』である。「著者たる予にとつても、本懐の次第である」と蘇峰自身が述べているように、普及版への力の入れようには目を見張るものがある。内容見本に目をやると、各巻の内容説明のほか、修史事業が評価され有栖川宮奨学金を賜った記事も掲載されている。毎月払い二円五十銭、一時払い五十五円で購入者にもれなく蘇峰の直筆原稿が贈られることも話題となった。普及版『国民史』全五十巻を専用の棚に並べた実物縮写の掲載も、読者の購買意欲を掻き立てたであろう。石川弘義と尾崎秀樹によれば、

普及版は当時としてはかなりよく売れた。／＼巻を追ってゆく形をとらず、第一回配本に「織田氏時代前篇」と「彼理来航以前の形勢」であり、読者の関心をひく上で効果的だった。

と、好評を博したようだ。昭和九年九月二十八日には帝国ホテルで普及版刊行披露会が、十月五日には青山会館で記念講演会が開催され三千人の聴衆が集まった。刊行披露会では「近世日本国民

史普及会」が設立され、『国民史』を文字通り全国に普及させる計画が発表された。戦時下において紙不足に陥っても、普及版の刊行は昭和十九年十月まで続いている。ビン・シンは同書を「帝國主義の大義へ國民を統合する」目的において「もつとも巧みな実物教育の著作」と意味づけているが、『国民史』は刊行数や売り上げという数字だけではなく、同時代において言論界の大御所である蘇峰の著作ということで、〈国民の歴史書〉として認知されていたと考えられる。さらに言えば、その認識は読者にとつて、書かれている歴史的出来事の普及のみならず、その出来事に対する正統性の根拠としての価値が付加されていたと言えよう。

一方で同時期の大衆文学領域では、通俗文学から距離を取るために、歴史小説への接近が図られていたが、〈国民の歴史書〉として広く普及していた『国民史』と並走、すなわち作品に同書の記述を取り入れたと想定されるのが、山手の尊王攘夷ものであった。

三 山手作品における〈歴史〉のトレース

昭和十年代の山手作品における尊王攘夷ものは二十八作に上るが、約半数の十三作は大橋訥庵、あるいは坂下門外の変を扱った作品である。さらに詳細に見ると訥庵の名前が出てくる作品が八作、訥庵の名は出てこないが坂下門外の変を扱った作品が五作である。訥庵は儒学に基づいた思誠塾を開き、文久年間の公武合体策としての和宮降嫁に反対し、老中の安藤信正襲撃計画を立案するも、計画が露見し捕縛された志士である。また訥庵を失いなが

らも、仲間が坂下門外で安藤信正を襲撃したのが坂下門外の変である。山手が訥庵と坂下門外の変に着目した明確な理由は不明だが、栃木、宇都宮という地が関係している可能性がある。訥庵は現在の群馬県の生まれだが、栗宮の大橋家を継いだことで宇都宮藩士となり、現在でも栃木県ゆかりの人物として伝わっている。

一方で山手もまた栃木県黒磯、現在の那須塩原市の出身である。

他の例だが、埼玉新聞社の創業者が栃木県出身だったことが縁で、戦後、同紙にたびたび作品を連載していたことを鑑みれば、『歴史』への歩み寄りを見せていたと想定できる創作期間において山手が着目したのは、同郷の訥庵であったと考えることもできるだろう。いずれにせよ山手作品で尊王攘夷もの、なかでも訥庵や坂下門外の変を扱った作品が昭和十年代に集中しているのは事実である。では具体的に山手作品と『国民史』との間には、どのような対応関係があるか見てみよう。

訥庵の思誠塾の門下生で運動に参加した志士の大治郎が、血のつながらない子供と生活を共にする絆を描いた「小父さん志士」『芸能文化』昭和十七年十一月)に、

長州と成破盟約が成立した。水はもう一度奸臣を斬つて先輩の意志をつぎ、長は事態の混乱に乗じて善後の処置をとり、俱に幕政を改革して攘夷を実行に移さうといふのである

という一節がある。一方で普及版『國民史 文久大勢一変 上篇』(昭和十一年六月)の「第一章 丙辰丸盟約 四 水長両藩士の盟約 (三)」に目を移すと、

是に於いて成破の盟成る。これを丙辰丸の誓と云ふ。破るとは横浜の夷人を殺し、要路の大官を刺殺するを言ひ、成すとはその機を見て、幕府に建言し、その失政を改めしむるを言ふ。すなわち水戸側は前者を取り、長州側は後者をとることとなつた

とあり、幕府が画策した和宮降嫁に対して、水戸藩と長州藩がそれぞれの役割を決めた盟約を結んだ経緯が、『国民史』の記述をなぞるように引用されていることが分かる。

また女に騙され大金を失った若い志士が、心機一転、訥庵の思誠塾で修行に励み、やがて按摩になった女と再会する「泥人形」(『サンデー毎日増刊号』昭和十六年六月)には次のような一節がある。

嘉永六年外国船の来つて交易を請うてより、幕府の処置一もその宜きを得ず、因循姑息を極め、外国はその隙に乗じて驕慢を逞うし、為に神州の命脈は次第に衰へるに至つた。／＼「されば勤皇の義心ある者に叛名を負はせずして、十分に其力を出させ、攘夷の快挙をなさんとするには、別の奇策と云ふ物なく、只速かに天朝よりして夷狄攘斥の勅命を公然と海内に下したまうて、感奮激發せしむるに如くことはなく、この策をだに決したまへば、神州の命脈は恢復せずと云ふことなし」。そして人心は既に徳川氏を去つてゐるから、幕府の滅亡は近く十年の間にあらんこと、鏡にかけて明白なりと喝破し、集る志士と共に断然倒幕運動の画策中であつた

これは悪女に騙され茫然自失としている主人公が訥庵の思誠塾を訪れる場面であるが、先に引用した『国民史』の「第三章 大橋訥庵等の運動 十 大橋訥庵の意見書(二)」には、

癸丑甲寅の歳、外國来て、通商を乞へるより以来、幕府の処置一事も其宜しき所を得ず、因循姑息のみを専らとせられしかば、外國は益々驕慢を逞しうして、／＼されは勤皇の義心ある者に叛名を負はせずして、十分に其力を出させ、攘夷の快挙をなさんとするには、別の奇策と云ふ物なく、只速かに天朝よりして夷狄攘斥の勅命を公然と海内に下したまうて、感奮激發せしむるに如くことはなく、徳川家の武威衰へはて、天下の人心全く離れ、／＼幕府の滅亡せんこと、決して遠きことにてはなく、近く十年の間に有んこと、鏡にかけて明白なれば、誠に危殆の至りと云ふべし

とある。波線部分を先の傍線と比較すると、訥庵自身の文章がベースになっているものの、基本的には『国民史』の記述を、山手が作品にそのままトレースしていると言っても過言ではない。加えて「志士の道」(『日の出』昭和十九年四月)は道場を破門になった若侍の三村源太郎が、偶然知り合った内田萬之助なる志士に桂小五郎の道場を紹介してもらう短篇である。本文には、

江戸市民の耳をおどろかしたのは、十五日に朝、坂下門外に安藤閣老が浪士六人に襲撃されたことである。襲撃は不成功にをはつて、六人とも壮烈な斬り死をとげたが、その中の四

人までは水戸浪士だつたさうである

と、坂下門外の変を起こした六人の志士の構成に言及している部分がある。さらに

あの斬込みの時刻に一足違ひで遅れてね、同志の者に申訳ないといふんで、こゝへ桂先生をたづねてきたんだ。後事を頼む、どうかこゝで腹を切らせてくれといふ。いろいろ宥めたのだが、桂さんとわしがちよつと席を外してゐる間に腹を切つてしまつた

というように、三村が桂小五郎の道場を訪れると、内田が坂下門外の変に参加できず、道場で切腹をしたことが明かされる。同作では、

坂下門義盟の士は、宇都宮側は、河野顯三、水戸側では平山兵介・黒澤五郎・小田彦三郎・高島総次郎・河邊佐治右衛門、而して江戸に於て加盟したるは、越後の志士、川本杜太郎であつた。／＼以上の七人であつたが、河邊は期を逸して、其場には臨まず、自余の六士は愈よ其の思を晴らす可く、正月十五日、閣老安藤対馬守の登城を、坂下門外に待ち構へてゐた

と六人の志士のうち四人が水戸藩であることが描写されている。『国民史』「第四章 坂下門外の事変 十七 河邊佐治右衛門の自殺」を見ると、

六人の刺客は、何れも討死にした。而して其の義盟の一人、河邊佐治右衛門は如何。彼は当日余りに早く坂下門外に赴いたから、同志の者、未だ一人も来り居らず、その為め附近を逍遙しつゝあつたが、やがて其の場所に至り見れば、既に事終りたる後であつた。仍て直ちに桜田門外なる長藩主毛利邸に抵り、桂小五郎に面会し、其約を踏まんが為めに自殺した

というように、河邊佐治右衛門の切腹についての記述があり、同書を参考にしてることが想定できる。

いくつかの例示に留まつたが、普及版の刊行によつて入手が容易であつたという観点も含めれば、山手が昭和十年代に多産した尊王攘夷ものが、同時代に広く読まれていた『国民史』の記述をなぞらえている可能性を指摘できよう。そして最も注目すべきなのは、山手作品が『国民史』をトレースしているにしても、それは舞台設定や時代設定という枠組みであり、あくまで作品の中心は、山手お得意の男女の恋模様や友情といった娯楽的な面が主であることだ。つまり〈歴史〉への接近が希求された昭和十年代において、山手なりの接近は、舞台設定として人口に膾炙していた『国民史』の記述をトレースすることで〈歴史〉の枠組みを引用することだつた。その結果として、この時期に尊王攘夷ものが多産されたという仮定は充分に妥当であろう。白鳥の『国民史』に対する「気軽に面白く読める」という指摘も、山手作品と同書の相性の良さを物語るひとつの要因と考えられる。しかし同時に「気軽に面白く」という要素は、同時期の大衆文学領域が掲げる

評価軸とは相容れなかつた。山手の尊王攘夷ものの多産からも看取できるように、〈歴史〉への接近が求められた昭和十年代の大衆文学領域であるが、その様相を同時代言説から明らかにしたい。

四 「大衆文学」と「大衆的文学」

『国民史』だけでなく、三田村鳶魚『時代小説評判記』（梧桐書院、昭和十四年四月）や、岩上順一『歴史文学論』（中央公論社、昭和十七年三月）など、昭和十年代は歴史小説に関する言及や書物の刊行が盛んな時期だつた。これは戦争によつてナショナルリズムが喚起され、伝統回帰や日本主義が議論をよび、民族や自国の歴史に関心を示したことの影響だということ論を俟たない。貴司山治が「大衆の文化的向上に役立たうとする切なる願望」、「やむにやまれぬ時代的関心のあらはれたるべき仕事」と宣言し、大衆教化としての歴史小説「維新前夜」（『朝日新聞』昭和十五年十一月十六日）、「十六年十月一日」を発表して話題を呼ぶなど、プロレタリア文学運動の派生としても歴史小説への注目を看取し得る。さらに、この現象は書き手側だけに見られたものではなかつた。高木卓「流行現象か 歴史小説について【上】」（『読売新聞』昭和十六年五月三十日）の、

歴史に対する一般の関心が外的なまた内的な作用によつて否応なしに高められつゝある今日、文学にそれが反映しないわけはない。／＼歴史小説がたとへ流行の現象であるにしても、それは歴史への一般的な関心が高まつてきたことの証左でも

ある

という言葉及に代表されるように、「否応なしに高められ」た関心が、作品を提供する側だけでなく、享受する側の読者からも高まり、一種の歴史小説ブームの様相を呈していたと言える。

一方で昭和十年代の大衆文学壇は、ある変節を迎えていた。

木村毅は明治以降の大衆文学領域の発達を「日本固有の講談的伝統」と「西洋移入の伝奇小説、探偵小説、科学小説」が、「或は対立し、或は混和し、或は扶助し合」って、「今日の隆盛をなしたものである」とまとめているが、しばしば指摘されるように、大正後期から昭和戦前期にかけての文学読者の量的拡大や、雑誌メディアの流通拡張は、大衆的読者を可視化するに至った。金子明雄はジャンルとしての探偵小説は、

新しい大衆娯楽雑誌や円本全集、廉価の全集企画の大流行などによって、かつてない規模で急速に文学の流通が拡大する中、時代小説を中心とした『大衆文芸』ジャンルが可視化した大衆文学読者に相乗りし、それを拡大するかたちで文学的コミュニケーションを現実化し、出版界における商業的コンテンツとしての価値を証明¹⁴⁾したことで成立した。

と大衆イメージの複層性と、全集の商業的成功も含めて、文学メディアにその価値を証明したと論じている。白井喬二によって結成された「二十一日会」に江戸川乱歩らが合流し、昭和二年から刊行が始まった『現代大衆文学全集』（平凡社）が時代小説と探

偵小説で構成されていることから明らかなように、大正後期から昭和戦前期にかけて「大衆文学」とは、時代小説と探偵小説を指し示すジャンルであった。だが次第に新聞連載で現代を舞台とした通俗文学と大衆文学の垣根を越えるような創作活動を見せる作家が散見されるようになる。「めりけんじやつぶ物」の書き手であった谷譲次が、林不忘の筆名で「丹下左膳」シリーズを手掛けたことは、その最たる事例であろう。直木三十五は昭和八年時点で、

今日、大衆文学の本質に定義を与へるといふ事は困難である。何故なら——大衆文学発生の当初に於ては、時代物のみを指した言葉であつたが、今日に於ては、その大衆なる名の下に、通俗的文学のことぐを、この下へ入れやうとする傾向がある¹⁵⁾

と、新聞連載でありながら「新らしき時代の物のみ」を「通俗小説、又は新聞小説」と称しているが、区別としては「甚だ曖昧」としながら、「通俗的文学」が大衆文学領域に組み込まれて認識されていることを指摘している。それは時代小説と通俗文学が同一領域の範疇として認識されるという事態を意味していたが、これに同領域の主を成す時代小説ジャンルは忌避反応を示した。他方では直木三十五や佐々木味津三が昭和九年に相次いで鬼籍に入ると、「孤城落月の感」¹⁶⁾、「どんな作家があるかと数へあげる段になると、實際寂寥の感」を禁じ得ないと評されるようになり、後継者問題も浮上していた。(通俗)との同一視を含めた、これら

の喫緊の問題に対し彼らが取った方針は、歴史小説への接近であった。そのことは明石鉄也が「時代小説の動向——大衆文芸時評——」（『改造』昭和十一年九月）において、

歴史物の台頭といふことが、現在の大衆文芸、時代小説界において、最も著しい現象である。／それが従来の固定した歴史小説なるものを指すのではなく、新しい形式と内容との歴史小説を開拓する意であることは確かであらう

と言及しながら、「新鮮で大衆的な歴史小説」を希求していることに象徴的に表れている。また三上於菟吉は、

日本においてのみ、特殊に大衆文学と呼びなされる、この特殊な文学は、現在の傾向それ自身のおのづからの発展で、やがて、歴史小説への新しい形式と内容を付与しようとする、大衆事業の緒につきつつあるのである¹⁷⁾

と言及している。大衆文学領域の主たる時代小説が、歴史小説に接近することを「発展」と評価していることから、評論家と作者、いわばジャンル全体として〈通俗〉への忌避と、〈歴史〉への接近を求める言説が主流を占めていたと判断できる。つまり〈歴史〉への接近を契機とした、〈通俗〉との完全なる決別を志向する機運が看取できよう。

昭和十年代における同ジャンルの様相をうかがうのに最適な同時代雑誌として『文学建設』（文学建設社）と、第三次『大衆文

芸』（新小説社）が挙げられる。この二誌は戦時下においても一定の頁数を毎号保ちながら、多くの作品や評を掲載していただけでなく、大下宇陀児が、二誌の誕生を「二つの喜び」として、「目ざすところは同じく、大衆文学の質的向上にある」というように、作家側からも大衆文学の現状を質的な面から打破し得る雑誌として創刊が期待されていた。

丹羽文雄や村雨泰次郎らによって昭和十四年一月に創刊された『文学建設』だが、同誌執筆陣のなかで特に活発な創作活動を見せていたのが、昭和十一年に直木賞を受賞した海音寺潮五郎である。昭和十三年九月から昭和十四年七月まで『サンデー毎日』と『文学建設』に連載された長編「柳沢騒動」は、講談によって俗説に埋もれていた柳沢騒動に対して、史料という客観的な視点を丁寧織り込んだ作品だが、その単行本の「序」で次のように宣言している。

僕は大衆文学の行きつまりの最も大きな原因は素材の貧困と様式の定型化にあることに気がついた。／大衆文学の行きつまりは、／先づその内容の分野をひろげ、その定型化を打破すべきだ¹⁸⁾

この定型化によって「行きづま」っている現状への憂いからは、明石の提言した「新鮮で大衆的な歴史小説」への志向に近似したものが読み取れるだろう。「重史主義」を自称した『文学建設』一派は、その具体的な手法として、史料の重視による内容の拡大を試み、その象徴的作品が「柳沢騒動」であった。一方で同誌の作

品評において、『国民史』の記述をなぞらえた山手の尊王攘夷ものはほとんど無視されるか、たとえ取り上げられても、

之は才だけでものしてゐる。といふことは、いつの場合でも山手樹一郎の弱点ではあるまいか。巧みな小説作法だけで書かずに、そこに気魄を持ち得ないか²¹

というような評価が下されている。「巧みな小説作法」は作品全体の低評価の要因として挙げられ、「気魄」の欠如を指摘されている。また同誌の作品時評には山手作品のなかでも「春宵つるぎ供養」(『婦女界』昭和十五年一月)や「敗走の夜」(『講談倶楽部』昭和十六年八月)、「愚直登用」(『講談倶楽部』昭和十六年十月)のような歴史的枠組みを取らず、娯楽的要素の強い作品がもっぱら取り上げられ、「形式は講談に近く／旧態依然たる旧大衆小説²²」、「端的に言ふ。これは講談だ。／本当の武士を理解してはゐない」といった「重史主義」の立場に起因した評価軸によって批判を下されることが常態化していた。

次に第三次『大衆文芸』に目を移してみよう。白井喬二率いる「二十一日会」が大正十五年一月に創刊したのが第一次、財政難から八ヶ月で休刊した第二次を経て、昭和十四年三月に新小説社から刊行されたのが第三次『大衆文芸』である。同誌で中核をなしたのが、丹念な歴史考証のもとに書き上げた「上杉太平記」(昭和十五年四月／十六年七月)や、「相馬大作の顛末」(昭和十八年一月／昭和十九年二月)を連載していた長谷川伸だった。このことから『文学建設』と第三次『大衆文芸』の姿勢や方針が、史

料の重視や歴史考証であり、「新鮮で大衆的な歴史小説²³」への志向という意味で共通していたことが分かる。同誌において注目すべきは、評論を担当していた中谷博の存在であろう。中谷は先に引用した直木の指摘、すなわち昭和八年時点で、大衆文学領域に「通俗的文学²⁴」が流入している状況を憂えた急先鋒であった。中谷は先の指摘をした直木に対して、

不都合だとも言っていない。否、氏は寧ろ此の傾向を容認しているらしく／それでいいのか？大衆文学をそんなにまで押し拡げて行つていいのか？²⁵

と批判している。そして、「大衆文学」と「大衆的文学」を「厳に区別」して意義づければ、前者は「大正末年から昭和初年にかけて、約十年間」に見られた中里介山「大菩薩峠」を祖とする、「虚無と破壊との文学」、「剣の文学」、「チャンバラの文学」だと結論付けているが、既存の文壇作家による通俗小説(≠「大衆的文学」)と、一線を画したい心性が看取できよう。中谷は第三次『大衆文芸』においても、同様の論旨を繰り返し展開していく。たとえば「大衆文学と大衆的文学―大衆文学本質論再論―」(『大衆文芸』昭和十四年四月)では、

大衆文学の今日の不振は、まことに言語に絶するものがある。もつと明確に表現すれば、大衆文学は既に滅び、大衆的文学が横行してゐる現在なのである

と、昭和九年から一貫した意見を表明している。続けて、これまたなぞるように大衆文学の読者は「暗雲低迷せる此の社会」において「何等積極的な行為積極的な行動」に出ることが出来ない知識階級であつて、彼らにとつて「知識階級そのもの、悩みを悩み、胸中の鬱懷」を「代弁」し、「やけつばちな破壊とか、抜けば忽ち死人の山を築く剣の魔性」を描く大衆文学は「魅惑」的であり、言い換えるならば「チャンバラ小説」の意に外ならないと、大衆文学のあるべき姿を提示している。そして結論としても改めて「下落と崩壊」の体を成している現状を「通俗文学の世界に転落して行きつゝ、ある」と断じ、通俗と見なされることへの忌避と危機を明確に表明している。昭和九年との違いは、同領域の若手作家たちを教え導く立場として、この一貫した立場に基づいた評論と作品評を、同誌で展開していくことだ。たとえば「大衆文芸の理念に就いて―特に若き作家に贈る―」（『大衆文芸』昭和十六年三―四月）では、冒頭から「大衆文芸は通俗文学ではない」と、〈通俗〉への忌避を表明している。続けてそれまでと同様に大衆文学の発生史について言及している。発生の起源をくり返し言及する点は、その出自と伝統を再確認することで、ジャンルに権威と規範を持ち込もうとしており、「通俗文学の泥沼の中に」ある大衆文学領域は、「往年の気魄を全く失念し去つて」しまったと批判しつつも、

最近に至つて漸く大衆文芸の本質を再検討して、文学としての本来性を奪還附与せんとする動きが、そらく見え初めて来た

と、ようやく文学としての本来性の「奪還」を目指した動きが見え始めたと期待している。そして

大衆文芸の作家こそは、通俗文学の作者との本質的相違を以つて、しかも言葉の最も正しき意味に於いて、真に選ばれたる者なることを必要とするのではないか。／文学の営みは人間性の根本義と繋がる場所のものであらねばならぬ。文章の末技ではない、腹の問題だ。技巧の良否ではない、信念の問題だ。読まれることの多寡ではない、永続の問題だ

と、書き手の態度として「末技」や「技巧」を否定し、「人間性」や「腹」、「信念」を求めるといふ、観念的な評価軸を展開している。これは「大衆文学の通俗化とは何ぞ」その二―大東亜戦争と大衆文学―」（『大衆文芸』昭和十七年九月）に至ると、

凡そ日本人たる者の心構へには真剣にして白熱せるものが要求されてゐるのだ。凡そ日本人たる者の生活態度には、誠實にして確固たるものが要請されてゐる

と、より戦時下のイデオロギー的色彩を帯びるが、「真剣にして白熱せる心構へ」と、先の引用の「気魄」は同質と捉えて差し支えないであろう。「気魄」という語が、『文学建設』において、山手作品に欠如しているものとして挙げられている要素であることも興味深い。しかし中谷が忌避する通俗小説や、「大衆的文学」の具体的な作品名は示されず、一方で目指すべき「大衆文学」も、

昭和十年代に入ると「人間性」や「気魄」、「信念」を持ち合わせた作品という、徐々に観念的な評価軸のみの提示に留まっている。つまりは志向する基準や具体的な面は不明瞭でありながら、介山の「大菩薩峠」を始祖として配置しながら〈歴史〉へと接近していく時代小説ジャンルを、「大衆文学」とラベリングすることで、領域自体の再測定を図っていると言えるだろう。

そんな中谷から高い評価を受けていた作家のひとりに、村上元三がいる。中谷は昭和十六年六月に『大衆文芸』へ掲載された「村上元三氏と山手樹一郎氏——特に若き作家の意義に就て——」において、両者を「通俗文学の中に埋没し去るかに見えた大衆文学」を「再び復古刷新」へと導く「新人」として挙げている。なかでも昭和十四年十月に『大衆文芸』に掲載された村上の「北緯五十度」に対して、「作品を書く気迫が鋭」く、「甘さに溺れてゐる」ことなく「極めて真面目な筆で以て描き出してゐる」と高い評価をしている。また昭和十五年十月に同誌に掲載され、同年に直木賞を受賞した「上総風土記」に対しては、「何か読者に重厚なもの感じさせる」点が、「村上氏の良き資性のあらはれてゐるところからであらう」と指摘し、「前人未踏の北邊物」の連作を「驚異に値」すると全面的に称賛している。一方、中谷は同評論で山手に対しては「タツチの軽妙さ」を挙げて、

勿論軽妙は軽妙で、それで大いに宜しいに違ひないが、年長の読者に訴へかけようと思ふならば、矢張り重厚な味があつた方がいゝ。／浮世の喜怒哀楽を軽く一と刷毛で、サツと極めつけて行くあたりは、読んでゐて胸のすく思ひがする。／

たゞ強いて難を言へば、氏の作品は余りに面白すぎるのだ、面白過ぎて、読者に考へる余裕を与へないことだ

という評価を下している。それなりに評価はしているものの、あくまで求めているのは「面白」さではなく、「新鮮で大衆的な歴史小説」²⁸たり得る「重厚」さである。「軽妙」は〈通俗〉的であり、「重厚さ」は「気魄」や「信念」と同義のものと捉えていいだろう。昭和十年代の山手作品で中谷の期待に応えられそうなのとしては、「獄中記」(『大衆文芸』昭和十八年七月)がある。本作は昭和十九年に第四回野間文芸奨励賞を受賞した『華山と長英』の一部分で、渡辺華山と高野長英を史実に忠実に描いた歴史小説である。山手作品のなかでも、友情や男女の恋模様など娯楽的な面を排した異色作であるが、本作に対しては、

今まで山手氏の作品に見られなかつた「力」が、「重さ」が見られるのは、作者の一進展として祝福したい。氏としても本格的に取組んでゐるのであらうが、此の傾向は大いに宜しい²⁹

と好意的な評価がなされている。そもそも同作をして「奨励賞」を受賞していることから、あるいは「読者に考へる余裕を与へる」「重厚な味」を求め、そうした方向を「一進展」としていることから、この時期の評価軸が〈通俗〉とは一線を画した「新鮮で大衆的な歴史小説」³⁰であるかどうかに基づいていることは、明白であろう。とすれば、昭和十年代の大衆文学領域における評価

軸は次のようにまとめられるだろう。すなわち〈通俗〉への忌避と〈歴史〉への接近は、大衆的文学／大衆文学、軽妙／重厚、面白い／信念、技巧／気魄といった二項対立に回収され、大衆文学の主たる構成ジャンルである時代小説は、後者を持ち合わせた作品であるべきという教戒として意味づけられる。

この評価軸に乗っ取れば、同時期の山手作品が大衆文学領域から無視、あるいは低評価を下されたことは、納得できるところである。一方で評論家による批評欄などを設けていない、いわゆる「読物雑誌」では、山手作品がしばしば掲載されていた。この事實は、既存作家や評論家らの〈通俗〉への忌避と〈歴史〉への接近といった心性、すなわち昭和十年代の大衆文学領域における評価軸と、それによるジャンル自体を再措定する機運を逆照射している。

五 占領下における再編成へ

〈歴史〉への接近を希求する時代は、長くは続かなかつた。敗戦後、GHQ／SCAPの占領下に置かれCIE、CCDの設置、日本映画に対するプレスコードなど、いわゆる「チャンバラ禁止令」が大衆文学領域へ重くのしかかったのだ。さらに敗戦によって純粹な娯楽が求められたなかで、大衆文学が面白くないと評価されるようになった。

今日の大衆は、もつと明るさを欲し健かさを希つてみると私は思ふ。／若し明るく健康で、而も感動的な大衆文芸が与へられたなら、大衆は歓呼してそれに飛びつくに相違ないので

ある³¹⁾

「新鮮で大衆的な歴史小説³²⁾」の希求に言及しながらも、「明るく健康な」時代小説の到来をも予見していた、明石の読みが的中したのだ。それを象徴するかのように昭和十年代の歴史小説ブームの牽引役だった『文学建設』と、第三次『大衆文芸』一派は「大衆文芸の大衆文芸たる醍醐味が完全に姿を消した³³⁾」要因として、槍玉にあげられるようになる。それは同時に山手が志向した〈歴史〉より娯楽性を前景化し、敵を斬らないことに心性を傾けた〈明朗時代小説〉に対する需要の高まりを意味していた。敗戦がもたらした混乱と貧困による暗い時世のなかにおいて、大衆文学領域は再編成の時を迎える。そのなかで山手は、小型雑誌の嚆矢ともいえる『読物と講談』（公友社）で連載した「夢介千両みやげ」（昭和二十三年）によって、躍進を遂げる。

注

- (1) 社会心理研究所「大衆文学の読まれ方―貸本屋の調査から―」、『文学』昭和三十二年十二月）は、全国の貸本屋利用者に対して「好きな作家」を調査している。その結果は「夏目漱石、江戸川乱歩、山手樹一郎」の順であり、また同様の調査を引用しつつ、藤井淑禎は「高度成長期に愛された本たち」（平成二十一年十二月、岩波書店）において、山手を「貸本界の帝王」と論じている。

- (2) 拙稿「新・山手樹一郎著作年譜」およびその制作過程」（『立教大学大学院日本文学論叢』平成二五年十月）
- (3) 徳富猪一郎『卓上小説』（民友社、昭和六年九月）

- (4) 正宗白鳥「蘇峰追懷」(『国民史』会報) 昭和三十七年四月
- (5) 杉原志啓「蘇峰と『近世日本国民史』——大記者の『修史事業』」(都市出版、平成七年七月)
- (6) 和田守「蘇峰会の設立と活動」(『大東文化大学紀要』(社会科学編) 平成二十七年三月)
- (7) ビン・シン『評伝 徳富蘇峰』(岩波書店、平成六年七月)
- (8) 徳富猪一郎「普及版刊行に就て」(『近世日本国民史』織田氏時代前編、明治書院、昭和九年九月)
- (9) 『出版広告の歴史 一八九五……一九四一年』(出版ニュース社、平成元年八月)
- (10) 注7に同じ。
- (11) 注4に同じ。
- (12) 貴司山治「実録文学の提唱」(『読売新聞』昭和九年十一月九日) 十三日
- (13) 木村毅「大衆文学発達史」(『日本文学講座』第十四卷、改造社、昭和八年十一月)
- (14) 金子明雄「探偵小説のジャンル言説と読者像——江戸川乱歩を中心に」(『江戸川乱歩新世紀』越境する探偵小説) ひつじ書房、平成三十一年二月)
- (15) 直木三十五「大衆文学の本質」(『日本文学講座』第十四卷、改造社、昭和八年十一月)
- (16) 岡田三郎「大衆作家論」(『文芸春秋』昭和十年十月)
- (17) 三上於菟吉「大衆文学の進展」(『文芸年鑑』第一書房、昭和十一年三月)
- (18) 大下宇陀児「大衆文学二刀流——ついたり・講談社の希望——」(『大衆文芸』昭和十四年五月)
- (19) 海音寺潮五郎「序」(『柳沢騒動』春陽堂、昭和十四年九月)
- (20) 明石鉄也「時代小説の動向——大衆文芸時評——」(『改造』昭和十一年九月)
- (21) 「作品月評」(『文学建設』昭和十六年一月)
- (22) 「各雑誌作品月評」(『文学建設』昭和十六年九月)
- (23) 「各雑誌作品月評」(『文学建設』昭和十六年十一月)
- (24) 注20に同じ。
- (25) 注15に同じ。
- (26) 中谷博「大衆文学本質論」(『新文芸思想講座』第七卷、文芸春秋社、昭和九年十二月)
- (27) 注26に同じ。
- (28) 注20に同じ。
- (29) 中原麟也「大衆文芸評」(『大衆文芸』昭和十八年八月)
- (30) 注20に同じ。
- (31) 注20に同じ。
- (32) 注20に同じ。
- (33) 鹿島孝二「明日の大衆文芸」(『出版情報』昭和二十二年十月) (かげやま りょう 本学大学院博士後期課程)